

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 23 年度
氏名	大高 裕子	指導教員 (主査)	山西 正子

論文題目	<b>日本語における一人称の使用実態 —高コンテキスト文化における女子の「ウチ」の使用から見えるもの—</b>
------	---

本文概要	
<p>日本語の人称代名詞は、その種類が多く、上下関係・親疎関係・男女差・年齢・心理状況により使い分けがなされている。特に一人称は、「わたくし、わたし、ぼく、おれ、あたし、ウチ、自分、わし」などがあり、二人称の「あなた、きみ、おまえ」、三人称の「あの人(方)、あいつ(ら)、やつ(ら)」などより多く、更に、男性語・女性語という性差がある。鈴木(1973)は、「自称詞を使い分けることによって対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認することができる」と日本語の一人称について説明しているが、実はその一人称も「「Xは」がピリオド(マル、句点)を超えて、次の文まで及んで行く例は珍しくありません」(三上 1960)とあるように、文脈上頻繁に省略される。このように日本語の一人称には、使い分けや性差などの特徴がみられる。</p> <p>筆者は、自分が在籍している大学の女子学生が友人と話す際、「ウチ」を使用しているのを何度か耳にしているが、「ウチ」は、研究者の注目を集めるほど、女子の一人称の一つとして広く認知され使用されるようになってきており、それは近年の特徴であると推察する。しかし、一人称「ウチ」についての調査・研究はあまり行われておらず、広がりやその使用実態についても解明されていない。</p> <p>本稿では、一人称の使用実態について幅広い年代・地域における調査を行い、そのコードスイッチはどこかを調べるとともに、特に「ウチ」に着目し論考を進めていくことにする。</p> <p>平成 22 年・23 年に、北海道・新潟県・東京都・埼玉県・奈良県・福岡県の中学生、高校生、大学生、社会人に対して「一人称における使用実態」のアンケートを実施し、1294 の回答を得た。そしてその結果、これまで関西および一部地域の方言であると認識されていた「ウチ」の使用率が 49% であり、中学生、高校生の女子を中心に地域を問わず広く使用されていることが判明した。1974 年の国立国語研究の調査では、その当時、東京での「ウチ」の使用率は 2% であり、この時点での東京での「ウチ」の使用の広がりはまだない。しかし、1979 年頃に始まった漫オブームや、その頃から 10 年間にわたって全国放送されていたアニメのキャラクターなどが「ウチ」の広がり大きく影響していると考えられるが、1992 年にアニメの放送は終了しており漫オブームも下火となっているため、現在の若者がマスコミから直接影響を受けているとは言えない。これは、「ウチ」に特化した質問において、「ウチ」の使用がマスコミからの影響であるという意識が低いこととも合致している。すなわち、現在の若者が使用している「ウチ」は、マスコミから直接影響を受けたのものではなく、漫オブームやアニメが伝播した「ウチ」が、女子の一人称として全国的に使用され定着していったものと考えられる。また、調査結果から、「ウチ」に対する方言意識が低いこと、「ウチ」の使用が成長とともに「わたし」や「あたし」に変化していることが判明している。この点から、「ウチ」は若者言葉であることが分かる。</p> <p>このように、長い年月をかけて若者言葉として定着してきた「ウチ」は、もはや一時的な流行や一部地域・地方の方言ではなく、一般的な人称詞の一つとして認知され始めているということである。さらに、「ウチ」という言葉は単なる一人称としてだけでなく、仲間を強く意識しているということを暗黙の内に伝えているとも考えられる。これは日本語が高コンテキスト文化の中で培われてきたことに起因するものである。つまり、高コンテキスト文化における「ウチ」の使用は、自ら作った「しきり」の中に居るといった帰属意識や自己の存在感・存在価値を確認するための強い自己主張の一つであると結論づけるものである。</p>	